

たのはぐ会 主催

# 第9回 荻窪講談紅の会

講談で知る  
江戸文化の  
愉しさ!



## たのはぐ会 会員募集のご案内

こんにちは。お蔭さまで第9回公演となりました。これも一重に陰に陽に応援くださった皆さまからの『賜もの』誠に有難う存じます。“荻窪に講談”との想いでスタートした本会も来春が第9回です。私達の「たのはぐ会」は、今後も日本講談協会発展の為に、神田紅師匠と手を携え、若い方々の応援を微力ながら尽して参ります。

江戸に咲いた講談を多くの方々に楽しんで頂きたいと念じており、是非、ご支援のご入会をお待しております。

**【一般会員募集】** 「荻窪講談」を楽しみながら、この話芸を守り育てるサポーターになりませんか？  
年会費：3,000円  
特典：年2回の公演会へご招待（1公演に付、入場券1枚送付）

### 一般会員の申込み方法：

お名前、住所、電話、FAX番号を下の記入欄にお書きの上、このパンフをそのまま、（上下半分のA4サイズに切り）

FAX：03-3399-2559 へお送り下さい。

後日入会手続の手順等を当会よりご連絡させていただきます。

※入場券購入もFAXにてお願いいたします。

**【賛助広告募集】** 広告出稿で「荻窪講談」をサポート、第10回公演の広告募集 地元社会への貢献をお願いします！

1口：5,000円 パンフレットに会社名記載（入場券2枚）

2口：10,000円 パンフレットに会社広告掲載（入場券3枚）

加入申し込み用紙  
荻窪講談一般会員

ふりがな	
お名前	
住所	
電話番号	
FAX番号	
メールアドレス	

■ 平成26年11月5日(水)

午後5時30分開場 午後6時00分開演(8時15分頃終了予定)

■ 杉並公会堂小ホール

東京都杉並区上荻1丁目23番15号JR荻窪駅より徒歩7分

入場料 2,500円(税込)

ウェブサイト **荻窪講談** で検索して下さい!

ごあいさつ

荻窪での講談会も回を重ねて9回目、いつも手弁当で支えて下さるスタッフの皆様や、万難を排してお出下さるお客様のおかげと心より感謝しております。来年の10回記念を前に、今回は「赤穂義士特集」に挑戦してみたいと存じます。講談はやっぱり義士伝！以前に荻窪で語った義士ネタを避け新たに組んでみましたのでご来場いただければ幸いです。 **日本講談協会理事 神田 紅**



### プログラム・プロフィール

**神田 紅**



**みのり**

平成25年8月 3代目松鯉に入門。埼玉県出身。前座修行中。



もみじ  
**紅葉**

平成13年8月紅に入門。現在二ツ目。人生これからと50歳からの入門。遅時きながら進化を続けて参ります。



やまぶき  
**山吹**

平成6年二代目山陽に入門。平成13年松鯉門下。平成18年真打昇進。「あなたの隣の講談師」を合言葉に老若男女問わない親しみやすい講談を展開中。

### 仲入り



ひょうし  
**陽司**

平成15年真打ち昇進。世の中のすべては講談になるはず！「創作講談」を究めることが目標です。



くれなゐ  
**紅**

平成元年真打ち昇進。博多っ子。荻窪はお三味線のお稽古で通った馴染みの大好きな町。古典から創作講談まで、紅流に染め上げます。

### 講談やってみまショー …「義士討ち入り」の決まり文句!…

「赤穂義士伝」にはたくさんの物語がありますが、討ち入りの決まり文句というものがあると、どの物語でも最後にこのくんだりを付け加えて読み終えることが出来ます。義士が討ち入り後、堂々と引き上げていく有様なので、人前で短く語るときにもってこいの一節です。

### 演目

6:00 ~

**「講談やってみまショー」**

講談の体験コーナーです。会場の皆様も、一緒に声を出して下さい。

はなわ ほ き うち

**「塙保己一」**

あのヘレン・ケラーにも影響を与えた江戸時代の偉人。たった一人で上京した少年辰之助の時代から総検校に登りつめる迄の出世物語。

あかかきげんぞう とくり わか

**「赤垣源三・徳利の別れ」**

徳利を手に赤垣源三は兄の屋敷を訪れましたが、あいにくの留守。そこで兄伊左衛門の羽織の前に座って別れの盃を交わし、言伝を女中に頼みますが…。

ちゅうぼくもどすけ

**「忠僕元助」**

いよいよ討ち入りの決行前日、片岡源五衛門は、家に仕えている元助に反物を持たせて暇を出そうとするが、なかなか納得してくれず困り果ててしまう。

7:10 ~ 7:25

ほりべやすべえ

**「堀部安兵衛」**

四十七士の中でも常に人気者の堀部安兵衛。しかし若い頃の素行は悪く、周りの人も見放すほどであった。彼を目覚めさせたある事件とは？

にどめ きまがき

**「二度目の清書」**

大石内蔵助に離縁された妻のりくは、子供や姑を伴って故郷の但馬豊岡に帰る。寺坂吉右衛門に託された文には離縁の訳があったが、年末の二度目の文には…。

8:15頃  
終了予定